midorinodam.jp

NPO法人
緑のダム北相模

August 2011 No.311-312

８月号の１枚：早稲田大学の学生を対象とした体験学校

［巻頭言］天災が人災に変化して行く、東日本大震災
人災が天災に変化する・・地球の森林の保全・再生

天災を起こさないために、全ての人々が協働して地球の森林を守らねばならない

東日本大地震発生の直後は、大変な天災に見舞われたと驚愕したが、日時を経るにつれ天災から人災へとの印象が急速に濃くなってゆく。震災と同時に発生した福島原発事故の後、東電他、各電力会社の対応と公表は、時間の経過とともに信じられぬ方向を辿っている。政府の対応は５カ月を経過した今も明確さに欠ける。

震災直後の国民の行動は、東北救助へと一心となった。然し、政府や電力会社等の対応は、時を経るにつれ人心にも悪影響を及ぼしている。政府の復興支援方針が未だ、明確でないことに、国民は天災が人災になったと苛立ちを感じている。

地球の森林は、毎年・約750万haを失っている（FAO）。違法伐採や無計画な焼き畑農法による地球の森林減少は人災である。計算上はあと、550年余りで地球から森林が無くなってしまうと云う。近年、世界各地で異常気象が多発している。天災を起こさないために、全ての人々が協働して地球の森林を守らねばならない。

我が国の森林の荒廃対策は、遅々として進まない。戦後復興の為の経済発展政策が先行して、環境問題を見落としていたのではないか。経済発展は国民生活の向上に大きく貢献したが、結果として環境問題に苦しまねばならぬ状況になっている。欧米に於いて森林産業が、環境と経済（産業）の調和を具現化している国がある。森林（自然）保護に関する成功事例をシッカリ学んで、国土の70%の森林国・日本が世界に範を示せるようにならなければなければならない。

石村　黄仁（本会、代表理事）

今月の定例活動

2011.08

８月　７日（第一日曜日）：
小原本陣の森/森林整備、担い手育成、技術向上。
　　持続的森林経営：弁当持参。参加費：４００円
８月２１日（第三日曜日）：
若柳・嵐山の森/里山交流、多様な森林活動。
　　主食・自分のお椀・箸・飲料水は持参。参加費：４００円

[定例活動]小原本陣の森

7月3日（第一日曜日）

さんさんと照りつける初夏の太陽、この日は最高気温３１℃を記録しました。川に飛び込みたくなるような暑さの中、小原定例活動が行われました。Forest Nova☆からは８名が参加し、汗を流しました。

今回の活動内容は、小原地区にお住まいの永井弘樹さんが所有されている平野の畑にある間伐材の処理で、畑に転がっている材を一か所に並べまとめるという作業でした。材の上には枝打ちされた枝が多数あり、運搬の障害となったため、まず始めにその枝を除去する作業から始めました。しかし、木材に挟まっていた枝がほとんどだったため、枝を引き抜く人、枝を運ぶ人、枝を整理する人、材を運び並べる人の４役に分かれ作業を行いました。炎天下の中、枝を運ぶことはかなりの重労働でしたが、森で汗を思いっきりかいたのは初めてで、疲れているのにも関わらず、すがすがしい気持ちで作業に取り組むことができました。

午後になる頃には、２Ｌの飲み物も尽き、作業効率が落ち始めました。そこで、一旦永井さん宅で休憩を取ることになりました。畳の香りと扇風機と愛情いっぱいのおにぎりと肉じゃがのおかげで、疲れも癒え、元気を取り戻すことができました。

昼食休憩後からは、材を並べる作業をメインに行いました。スリングやてこの原理を活用して、重くて大きな材もどんどん並べることができました。全部の材を並べることはできませんでしたが、暑い中みなさんのベストの力を発揮できたと思います。また、数人でじゃがいも掘りを行いました。そのじゃがいもは、お持ち帰りさせていただきました。私は、カレーやポテトサラダにして食べました。とてもおいしかったです。

作業後は、再び永井さん宅に戻り、古民家の案内と食事をごちそうになりました。古民家の中は、昔の麦の脱穀機や機織り機がありました。私が一番驚いたのは蔵の鍵の形でした。建設当時から、しっかりとした防犯対策が施されているのだと深く感心しました。食事も地元の山の幸をふんだんに用いた煮物やカレーなどをいただき、非常においしかったです。また、会話にも花が咲き、貴重な体験談を聞くことが出来ました。

最後に、永井さんにお礼の言葉をいただきました。しかし、こちらもおいしい食事や楽しい会話をたくさんいただいたので、感謝の気持ちでいっぱいでした。お互いのありがとうという言葉が、さようならのあいさつとなりました。

治田　世以良
（Forest Nova☆）

[定例活動]若柳嵐山の森

7月17日（第三日曜日）

「夏パワーフル、熟年・若者！」

山百合の美しい立ち姿・香り漂う。整備林に差し込む陽の光が美しい。その森に中は涼しい。そして、夏草のように逞しく元気な若者・熟年たちの夏の森。

参加者は、望星の森（高井戸中＋望星高校＋ＯＢ）が４６名、学生フォレストノバ１３名，早稲田大・金山先生の講座から学生７名、生命の森宣言・東京９名、一般１４名、合計８９名。そして、津久井森林組合から鈴木副会長、坂本専務理事、県立・相模湖交流センターの櫻田館長の参加。

作業前のミーティングでは、真夏のこの時期、熱中症と大スズメハチが怖い。朝礼で対処方法を詳しく説明し、一日の作業が始まった。

・「生命の森宣言・東京」は、9月25日～10月5日開催の「UIA2011チェアシティコンペ」に出品する作品作成の為の材の搬出。 4m玉切りの大木にロープを掛け8人一グループで下り・上りの急坂を引っ張り出す。

下りでは「諏訪の御柱祭り」の様なスピードで滑り下りる大木に、カメラのシャッターも間に合わない。コロを敷いた登り坂では全員、渾身の力を込めて引き上げる。森仲間たちは、猛暑の夏作業に汗ビッショリ。成果は、見事！10本、熟年パワーに感動！。

「森林再生実行委員会」に全国からの約250点もの応募作品があったが、その中からこの国際認証の森の大木で最優秀賞作品を製作して出品する。実行委員会を指揮する丸茂理事も作業に参加して満足・納得。

生命の森：佐藤リーダーも「良い仕事 は、疲れも吹っ飛ぶなぁ～！」

・望星の森：高井戸中＋望星高校＋ＯＢは、日大桜井先生・東海大田中先生のご指導で「二酸化炭素の固定量調査」と言う難しい課題に取り組んでいる。 午後はなみすけの森にて間伐の効果を確認するための区画の設定、その区画内に毎木調査用のナンバリングテープ打ちを行った。 生徒指導の宮村先生・佐藤先生の声がビンビン響く。生徒と先生方の信頼感一体のスガスガしさが涼を呼ぶ！。

・フォレストノバは、森林整備班とヒノキ皮剥ぎ班に分かれる。原木をモマハウス裏に蓄木・林内乾燥した皮剥ぎ作業は、ワイワイと賑やかで楽しそう。

・早稲田大学・金山先生の講義に参加する学生は、緑のダム学校・斎藤学校長率いる森林体験。

・森をグルリ、県立・相模湖交流センターの櫻田館長を案内した。「今後、地元の方と森づくりとの交流に取り組みたい」との嬉しい申し出がありました。

終礼での学生の発表は「森林に直接触れたことで、森の価値を改めて知った。僕の人生観が変わってしまった」。「自然の生命力の強さ、森の文化・価値・大切さを実感した」など、学生の個性を感じさせられる内容でした。

伊藤　小夜子
（本会、会員）

上：集材する生命の森
中：測量中の中学生
下：皮むきと製材作業

[報告１]
相模原市、内陸グリーンハブ都市構想報告

7月15日（金）

環境経済局との話し合い結果について報告します。この日、相模原市本庁舎会議室で環境経済局・森林担当部署と話し合った。

出席者は相模原市：加藤経済部長、山口津久井経済観光課長、永田担当課長、伊藤主幹、緑のダムからは石村（本会代表理事）、小林会員、石井（津久井森林組合常務理事）である。

昨年５月、当会は「内陸・グリーンハブ都市構想（１）」を提案し、「さがみはら森林ビジョン」が本年３月、ホ―ムページ上で公表された。これを受けて当会は、「森林再生・グリーンハブ（２）」を申し入れた。今年・新任の石井森林組合・常務理事の参加は、極めて意味有るものであった。内容については

１．資金の捻出について、殆んどの地方自治体は赤字財政。その資金捻出方法：知恵を絞ればある。
２．森林再生実行システムの構築について、森林組合を核に、林業行政＋民＋産＋学の協働体制をつくる。
３．事業推進の具体化ステップについて境界線確定と路網作り。先ず、手元のできることから。
４．事業計画策定及び、広報活動について、一般市民の理解・全ての人々との協力なしには具現化は不可能だ。
５．予算策定と市議会への提出について、最初は小さな予算で。継続して掘り下げれば広くなる
６．その他：資料【１】森林資源木材の供給と需要【２】森林環境と経済の両立する欧州林業について

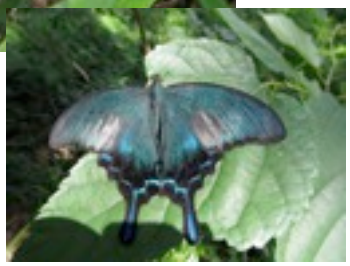
相模原市・担当部署の皆さんは真剣に聞いてくれた。また、津久井森林組合が組織改編・強化して動き出した。神奈川県、山梨県も手伝ってくれる。沢山の市民・企業・大学・研究機関が協力しようと申し出てくれている。

石村　黄仁（本会、代表理事）

[報告２]湘南の森活動報告

6月10日の活動では、小生が浅間山北斜面の笹刈り、他の人たちがヤブラン平の北斜面の整備を行いました。またまた、蝶の写真が撮れました。今度はジャコウアゲハでした。

ヤブラン平で昼食をしていたら、先日会った蝶の専門家、Ｎさん、本名・中村なおみさんが出現、蝶の食草をめぐって話が弾んできました。いままで、何気なく刈っていた草の中にも、大事な蝶の食草が混じっていることを聞き、一同納得しました。中村さんも、私たちが下草刈りを続けてきたおかげで蝶が増えたことを高く評価してくれて、意気投合、その場で正会員に入会してもらいました。中村さんの案内で、高麗山付近にひと株だけあるとされる「キジョラン」を見に行きました。この草は前月号で私が写真を掲載したアサギマダラの食草だそうです。キジョとは鬼女のことで、種が鬼女が髪の毛を振り乱しているようだとのイメージで命名されたとか。ちょっと見てみたいものです。先ほど写真をモノにしたジャコウアゲハの食草である、オオバウマノスズクサもあちこちに見られることも教わりました。蝶との関わりで木や草を覚える、これは生物多様性にとっても意味のあることだと思いました。



これから夏草が繁茂するのに合わせて、私たちはどこまで草を刈るか、とても悩ましいところです。結局は森の住人たちの最大多数の幸せを念頭におくことしかありません。蝶に対する関心がきっかけになって、より深く森の生態系について考え始めた私たち、「蝶南の森」と改名しちゃおうか！？これはおやじギャグでした。

佐藤　憲隆（湘南の森）

[報告３]
フォレストノバ活動報告

７月2日（土）に早稲田大学の「思惟の森の会」さんと新入生歓迎会を兼ねた交流会を行いました。

今回この交流会が行われたのは、思惟の森の会さんとForestNova☆は、互いが森を活動場所として森林整備を通して環境活動を行っていたことと、以前から何度か思惟の森の会のメンバーが嵐山の定例活動に参加されていたこともあって、似た活動を行っている団体同士、交流会を行い活動に対する視野を広げようと発考えたことがきっかけでした。
思惟の森の会さんは、1967年に創立された、早稲田大学の中でも長い歴史を持った団体で、主に岩手県田野畑村で山の育林作業と、地域交流、学生同士の交流の３つを軸として様々な活動を行っています。

思惟の森の会さんの活動は、初代顧問の小田先生の「厳しい環境の中で生きてきた田野畑の村人と触れ合い、右も左も学生も教師も関係なく、同じ星の下で同じ釜の飯をつついて人生を語り合うことにこそ教育の原点がある」という考えから田野畑村に自然教育の場を作ろう、という所から始まりました。活動を行っているのは70～80年代に思惟の森の会が植林したスギやアカマツを中心とした人工林で、長期休みを使い学生らが泊まり込みで地元の方と作業を行っています。

思惟の森の会さんの活動場所である田野畑村は、今回の東日本大震災で発生した津波により多大な被害を受けました。現在は被災地復興のために瓦礫の撤去、支援物資の整理、泥などで汚れてしまった写真を洗うなど田野畑村で様々な場面で関わっています。

ForestNova☆はまだ創立5年目の団体ですが、思惟の森の会さんは今年で45年目ともなる団体です。どのようにして団体の活動目的を見失わずに維持していくのか、創設時のメンバーとの方との繋がりをどのように維持しているのかなど、参考になる場面がいくつもありました。
今回の交流会は新入生同士の顔合わせ、団体紹介でほとんど終ってしまいました。まだまだ話し足りない場面もあり、今後は一緒に活動したりして、より交流を深めてゆきたいなと思えた交流会となりました。
ForestNova☆も思惟の森の会さんのような団体を目指して、自分たちの活動の目的を見失うことの無いようこれからも活動していきます。

植木　聡（Forest Nova☆）

[報告４]総合講座「望星の森」について

本校の総合講座「望星の森」がSPP（サイエンスパートナーシッププロジェクト）に４年連続で採択されました。今年度のテーマは「間伐と炭素貯留量」。京都議定書では、化石燃料消費によるCO_2増加への対応には、人為による削減が不可欠であるとの観点から、伐採等の森林管理に、炭素固定機能の向上効果を期待しています（人手を加えない天然林は吸収源に含めていません）。しかし間伐すると樹木の成長が促進されCO_2の吸収量は増すとされるものの、樹木数が減少してCO_2の吸収量は減少するのではとの疑問も湧きます。そこで今年度は、生徒自らの調査に基づき、森林の炭素貯留量に対する間伐の意義について考察することを目的としました。

7月17日は、日大の桜井先生と東海大の田中先生のご指導のもと、間伐を実施した林に残された切株の年輪間隔を測定するため、切株の上面を手ノコで円盤状に切り取る作業を実施しました。調査区域は、モマ工房周辺とD地区の下、ムササビの巣を設置しているあたりの二箇所。猛暑の中、熱中症、スズメバチ等の事故もなく、無事に年輪を採取することができました。午前中は、杉並区立高井戸中学校の生徒さんも手伝ってくれました。持ち帰った切株は、年輪の中心を通る最大直径と、年輪の中心を通ってこれに直行する直径に沿って年輪の間隔を測定し、各年の成長度合いを推定します。

佐藤　修（東海大学付属望星高等学校、教諭）

[報告５]大船渡市の保育園などに積み木を寄付

「森の積み木」プロジェクトの第１回は、６月２４日(金)岩手県大船渡市三陸町の４施設（綾里こども園、吉浜こども園、越喜来保育所・幼稚園、甫嶺へき地保育所）を訪問し、子供達および先生方に大変に喜んで頂きました。

今回の訪問について、現地の新聞の東海日報に記事が掲載されました。

なお、越喜来保育所・幼稚園では、職員室を避難してきた保育児の教室に当てたため、相模原市が贈った仮設建屋を職員室に使用しているとのことで、支援物資についても感謝の言葉を伺い、相模原市担当部署にお伝えしました。また、別のところで相模原市が派遣したセラピストと医師のペアーの活動が他の自治体の派遣よりも高く評価を受けたと聞きました。

相模原市の支援が大船渡市の市民レベルで評価されているようです。次回の活動は８月上旬を予定しております。

川田　浩（本会、理事）

左列：調査活動する高校生と桜井先生、田中先生
中列、右列：大船渡市のこども園にて

[報告６]「緑のダム北相模」との展望について

相模湖交流センターの設置目的は、「水源地域の自然の保全及び活性化を図り、併せて県民に水源地域の自然とのふれあい及び多様な交流活動の場を提供する」ことです。

「NPO法人緑のダム北相模」との最初のご縁は、今年６月19日（第３日曜日）同会の総会で当館会議室を使って頂いた事に始まります。

まず冒頭に申し出があったことは「山で作業をしてきたので、靴に土がついています。館内を土で汚さないよう、靴を洗いたいのですが・・・」とのこと。我々は早速裏にご案内し、散水栓にホースを繋ぎ靴を洗える体制を整えました。

大勢の方々が粛々と靴を洗い館内に入ってゆく光景にとても驚かされました。

さらに、お帰りの際、総会参加の学生さんたちが最後まで、施設内の通路・階段の土の汚れを取っていたことでした。素晴らしい若者の姿でした。

森林の大切さが忘れられている現在、当施設の設置目的を果たすことからも、当館は「NPO法人緑のダム北相模」と連携して、地元や都会の多くの方々に参加を呼びかけ「森の体験教室」を開催したいとの思いが膨らみました。

大自然の中で生活している地域の方々には、氣付きにくいかも知れませんが、改めて森の大切さを感じて頂きたいと思います。当館の役割として継続して「自然の保全、地域の活性化森」を推進していきたいと思いますので、ぜひともご指導の程お願い申し上げます。

櫻田　徳仁（県立相模湖交流センター、館長）

[事務局からのお知らせ、お願い]

森の積み木プロジェクト第２陣が大船渡市へ入ります

６月に相模原市と協力関係にあり、東日本大震災で被災した大船渡市の保育園、幼稚園に本会の積み木を寄付致しましたが、次回の活動は８月上旬を予定しています。前回積み木を配れなかった残り11施設へ訪問の予定です。活動の報告は来月号を予定しています。

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合してください。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食；自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

NPO法人
緑のダム北相模

急がず、無理せず、楽しく、休まず、ボチボチと・・。
そして、沢山の参加で森は、良くなる。
（台風の日は勉強会開催。１３年間、一日も休まず“継続は力”。）

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
事務局：154-0023　東京都世田谷区若林３－３５－９
発行人：NPO緑のダム北相模　事務局　03－3411－1636
ＵＲＬ：http//www.midorinodam.jp
E-mail： info●midorinodam.jp　●を＠に変更して使用してください

協働団体：セブンイレブンみどりの基金、相模原市（市民協働推進課）、東海大学付属望星高等学校、生命の森宣言・東京
支援団体：WWF JAPAN、イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、JFEメカニカル、東急コミニテイ、マルモ出版